

上野恩賜公園アートクロスの整備について

1. はじめに

上野恩賜公園は、明治6年太政官布達により日本の都市公園第1号として誕生した。JR 上野駅西側に位置し、国立西洋美術館や国立科学博物館など日本を代表する文化施設が集積している、開園面積約 54ha の都立公園である。

平成 25 年に、青柳正規・文化庁長官及び宮田亮平・東京藝術大学学長（両名とも当時）を発起人代表として、上野恩賜公園を中心とした区域（文化の杜）においてハード・ソフト両面にわたる整備方策について検討することを目的とする『上野「文化の杜」新構想推進会議（以下、推進会議）』が発足した。会議の構成員は上野恩賜公園周辺の文化・文教施設、行政、民間企業などである。

令和 3 年 11 月に推進会議の下にある上野「文化の杜」新構想実行委員会（以下、実行委員会）から、東京藝術大学、東京都美術館、旧奏楽堂などの文化施設が交差する広場（図-1）の整備を図り、賑わいのある文化拠点を創出することを目的とした「アートクロス整備提案書」が東京都に提出された。本発表会は提案書の内容に沿って進められた整備について報告するものである。



図-1 アートクロス位置図

2. 事業内容

整備提案書を受け、実行委員会と調整を行いながら、令和 3 年度に基本設計を令和 4 年度から令和 5 年度に実施設計を進めた。令和 5 年度から 6 年度にかけて、園地改修工事及び 6 号便所建築工事と令和 6 年度に特例都道第 452 号神田白山線歩道改修工事（南側歩道）の 3 つの工事に分けて施工した。歩道改修工事は第六建設事務所からの執行の依頼を受けて公園と道路の連携によって整備した。工期が最後となった園地改修工事が令和 7 年 2 月 13 日に完成し、アートクロスに関係する全ての工事が完了した（写真-1）。

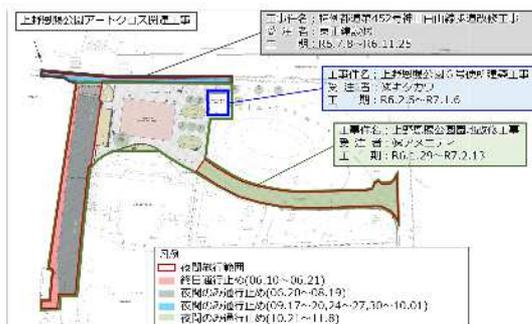


図-2 競合工事



写真-1 完成した広場

広場を整備する上での課題は、狭い工事エリアに3つの工事が競合することであった（図-2）。まずは、建築工事を先行させ、建物躯体を構築してから広場を工期内に完了する必要があるため、全ての工事受注者が出席する週一回の定例会議の開催や定期的な現場調整を行った。また、建築工事の区の完了検査までに造園工事と歩道工事とで設置する視覚障害者誘導ブロックの設置が必須であったため、全ての工事で工程を共有し、各工事の遅れが生じないように工夫した。

歩道と広場は同じインターロッキングブロックで一体的に整備する必要があったため同時期に舗装できるよう工程管理を徹底して行った。

また、造園工事は公園利用者の多い空間であるため、施工が完了した範囲で中間検査を受け、仮囲いの位置を変更し、早期開放を図った。ただし、通行止めが必要な舗装工事などに限っては、影響が大きい隣接施設と工程調整を図り、調整後も3週間工程表を事前に共有するとともに、現地掲示や東部公園緑地事務所のHPに掲載するなど公園利用者に周知した。夜間施工した区域も施工後、すぐに開放するなどの工夫をした。

さらに、旧奏楽堂で音楽イベントなどが開催される日は、音の出る工事を取り止め、東京都美術館へ美術品の搬出入が行われる日は、施工時間の変更をするなど、隣接施設と綿密な調整を行った。

3. 整備内容について

本工事の特徴とし、キャンパスに見立てた旧奏楽堂に正対する滞留空間としてアルゼンチン斑岩を使用した自然石舗装（図-3）があり、大きさの異なる複数の石材約14,000枚を組み合わせて手作業で舗装した。

また、東京藝術大学の芸術作品が展示してある「芸術の散歩道」である、ギャラリーパスはアートのクロスに至る自然の散策路として半たわみ性舗装としたが、周りの舗装との連続性を考慮し、300mm×600mmの目地を入れた石張り風とした。ほかにも東京都美術館の搬出入動線となる園路は平滑性のあるアスファルト舗装のステンシルボンド工法を採用し、型紙と着色により石張り風とした。

また、上野恩賜公園は東京都地域防災計画で避難場所などの位置付けがある防災公園であるため、災害時に使用可能な防災仕様の便器を設置した。また、母屋と建具に多摩産材を使用し（写真-2）、良好な自然的景観に調和した意匠とした。

広場と歩道については、インターロッキングブロック舗装で統一し、一体的に整備することで、広がりがある空間を演出した。

4. おわりに

今回の工事でハード面での整備が整ったため、今後は隣接施設とのソフト面での調整を進め、より充実した広場空間となるよう上野文化の柱の中核を担う上野恩賜公園のQOSの向上を図っていきたい。



図-3 自然石舗装（アルゼンチン斑岩）



写真-2 多摩産材を使用したトイレ